プリーストリのコモン・センス学派批判序説

Priestley on the Common Sense School: An introduction

永 井 義 雄

NAGAI Yoshio

小論は，J.プリーストリ（1733－1804）がコモン・センス学派の三人の思想家に対して行った批判のごく一部を紹介しようとする。その三人とは，T.リード（1710－1796），J.ビーティー（1735－1803），J.オズワルド（？－1793）である。プリーストリの著書のタイトルは次のごとくである。

Joseph Priestley, *An examination of Dr.Reid's Inquiry into the human mind on the principles of common sense, Dr.Beattie's Essay on the nature and immutability of truth, and Dr. Oswald's Appeal to common sense in behalf of religion,* London 1774.（センター所蔵は第二版）

この書物の「序（The preface)」でプリーストリは，三人の書物それぞれについて概説的な話をしている。この書物ではこの「序」が最も面白く読める。小論が紹介するのはこの「序」である。

最初にプリーストリは，自らがロッキアンであり，ハートリ（David Hartley, 1705－1757）から学んだ事を告げ，この立場と「リード博士」の考えとはかなり違うことを指摘する。プリーストリは，リードの『人間精神研究』が，イングランドでもスコットランドでも評価が高いのに驚き，娯楽のために書かれたのなら楽しいけれども真面目に書かれているのに驚くと言う。（〔vii〕－viii）

確かに Dugald Stewart, *Account of the life and writings of Thomas Reid,* Edinburgh 1803 はこの *Inquiry* がリードの著作のうちで「最も独創的かつ深遠である」と認めている。（p.26. なおこのスチュアートのリード論は後にリードの最初の全集に収められた。*The Works of Thomas Reid,D.D. Now fully collected, with selections from his unpublished letters, preface, notes and supplementary dissertations, by Sir William Hamilton, Bart.,...prefixed, Stewart's Account of the life and writings of Reid;* 〔*sic*〕 *with notes by the Editor,* Edinburgh 1846. この全集は Victor Cousin に献呈されている。）

「ビーティー博士」については，そのヒューム批判のゆえに親近感を持ったらしく，『真理論』を刊行後すぐに読み，著者の善意と併せて好感をもって受け取ったことを述べている。その時点では批判を書くつもりはなかったというのが，プリーストリの率直な告白である。（p.viii）しかし「オズワルド博士」に対しては最も手厳しい。『共通感覚への訴え』も評判のよい本であった。だから，プリーストリも読む気をそそられたのであったが，長く読む気がしなかったと書いている。読んで面白くなくはなかったが，驚きと怒りとを覚える方が大きかった。（p.ix）そうしてプリーストリが最も軽侮したのもオズワルドであった。プリーストリはオズワルドが道徳と宗教との大敵だと言うから（pp.262ff.），驚きと怒りのみならず，軽侮していた。それは本文中の随所に現れている。そのためであろう，プリーストリは『講義（*Institutes of natural and revealed religion,* London 1772-74, 3 vols.)』の第三巻の執筆のさいにすでにオズワルド批判の短い論文を付けようと考えたことがある。しかし，これは書物の全体構想

が崩れるので放棄され，その第三巻の「序」の中で自分が容認出来ないオズワルドの原理を引用するにとどめた。そうして，もっと長いオズワルド批判をリードおよびビーティーと並べてここで展開したのである。（なお，念のために言えば，*Institutes* の第二版以降は，すべて二巻本となる。内容には変化はない。The second edition, 1782; the third edition, 1794; the fourth edition, 1808.）

プリーストリがハートリに心酔しその『人間の考察（*Observations on man, his frame, his duty, and his expectations,* London 1749）』のリプリントを作った（*Hartley's theory of the human mind, on the principle of the association of ideas, with essays relating to the subject of it, by Joseph Priestley,* London 1755）ことは周知である。プリーストリもまた哲学的必然論の立場をとる。（ちなみにプリーストリの友人パーもハートリの抜粋を作っている。Samuel Parr, *Metaphysical tracts by English philosophers of the eighteenth century,*...London 1837）かれの教育論はこの立場から書かれた。ここで興味があるのは，プリーストリが必然論について，若い時に「精霊学と倫理学」を勉強しないと理解出来ないこと，またアルミニアンの自由意志論と哲学的必然論とは同じものだと，説いていることである。

ここではこの重要な論点にプリーストリ自身も立ち入っていないが，その代わりにハートリとジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards, 1703－1758）の「自由意志論」とを読むべき事を指示している。ここでのエドワーズの著作とは次のものであろう。

Jonathan Edwards, *A careful and strict prevailing notions of that freedom of the will, which is supposed to be essential to moral agency, virtue and vice, reward and punishment, praise and blame,* N.Y., n.d.（1754）2 vols.（Another editions, Boston 1754 and others）

エドワーズはこれからわが国でも研究されねばならない思想家と思われる。かれはベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706－1790）とともに「十八世紀の代表的アメリカ人」として併称され，「近代最初の偉大な宗教復興」を担った。（Frederick Rudolph, *The American college and university, a history,* N.Y., 1962, p.19）プリーストリによればエドワーズはもう少し長生きしたら自分の哲学がカルヴィニズムよりもソシニアニズムに結び付くことを知ったはずだと評価されている。エドワーズは哲学的必然論をカルヴィニズム，哲学的自由論をアルミニアニズムと同じと見ている。しかし，プリーストリは，アルミニアニズムは一般に自由と必然は救済の如何にかかわらず人間によるとするのに対して，カルヴィニストは神意によるとする違いがあるだけであって，宗教とのかかわり方が違う以外，人間意志の自由一般について同じ見解に立つと考える。

エドワーズとはいかなる人物であったか。「疑いもなく『意志の自由』はエドワーズの名声の礎石である。…それはニュー・イングランド神学のバイブルとなった。」こう評価する一方でこの評者は，この書物は今日のわれわれの読むに値するものではないと言う。「なぜならそれはウィッティ（Whitty），ターンブル（Turnbull）およびチャブ（Chubb）の様な若干の不運なアルミニアンズを粉砕することを目的としていたのだからである。」それでは反アルミニアニズムのエドワーズをなぜアルミニアニズムにごく近いプリーストリは評価するのか。

（ここで挙げられた三人の同定はいささか困難であるが，わたくしの目下の推定を述べておく。Whitty は *Nineteen sermons on various subjects,* London 1766; *Sermons,* London 1772 の著者 Rev. John Whitty であろうか。生没年は分からない。Turnbull とは George Turnbull, d. 1748 ではないかと思う。このターンブルはかなり多くの著書を書いている。そのうち三冊のみ挙げ

てみる。Dr.S.Clarke や Matthew Tindall に言及した *Christianity neither false nor useless...*, London 1732; 一般教育を論じた *Observations upon liberal education...*,London 1742; 道徳哲学を論じた *The principles of moral philosophy, an enquiry into the wise and good government of the moral world...*, London 1740, 2 vols. Chubb は Thomas Chubb, 1679－1747であろう。一冊だけ著作を挙げておく。*The ground and foundation of morality considered, wherein is shewn, that disinterested benevolence is a proper and a worthy principle of action to intelligent beings....occasined by the Rev. Mr.Rutherford's essay on morality,.....*London 1741.)

「諸機能は運動の様式であるというロックの独創的な発見に対してエドワーズは厳格に忠実であった。」エドワーズはロッキアンであったと言えるのである。「『意志の自由』の核心は有機体の単一かつ機能的性格の主張である。」それ故，エドワーズに対する当時から今日にいたるあらゆる批判は，かれが「人間を自然の一部と見た」という点に帰着する。(以上，Perry Miller, *Jonathan Edwards*, Cleveland and NY, 1959 [first published 1949], pp.250-256.)

プリーストリはこうして非常に興味あることに，エドワーズ的カルヴィニズムに自らとの理論的共通性を認めつつ，逆にコモン・センス学派にヒュームと共通する懐疑論を認めて峻拒し批判するのである。リードはコモン・センス（共通感覚）をもって人間精神の諸現象を説明するが，この感覚はその起源を問われないで特定の「原初的本能（original instinct)」に帰せられている。ここが理論的に説明されない限り，「懐疑論者」と論法は同じになる。プリーストリのコモン・センス学派批判はそれ故ヒューム批判と重なってくるのである。プリーストリ（およびプライス）にとっても，コモン・センス学派にとってと同様にヒューム的懐疑論は無神論に通ずるもので許し難かった。（プリーストリのヒューム批判は，『講義』，特にその第二巻〔第二版以降は第二部 Part two となる〕および *Letters to a philosophical unbeliever*, Bath 1780. の Part 1に詳しい。〔またこれの第二版のバーミンガム版（1782）の Part II はギボン批判であり，フィラデルフィア版（1795）はペイン批判（Part III）を含む。〕ちなみにプライスのヒューム批判は『道徳の主要諸問題の評論』（1759）。）

それと同時に，ここはまた思想史解釈上の対決の場でもある。リードは，懐疑論（ヒューム）がロックに立脚すると言う。ロック主義者として，かつヒューム的懐疑論を峻拒するプリーストリはこの発言を看過し得ない。（リードのロック批判に対するプリーストリの批判は本書の25ページ以下。）こうしてプリーストリはリードをはじめとするコモン・センス学派批判に進むのである。

わたくしはこれ以下の本文の検討に別に稿を改めて入りたい。その前に一言，篠原久『アダム・スミスと常識哲学—スコットランド啓蒙思想の研究』（有斐閣，1986）がこの国でのほとんど最初のリード研究を含んでいるけれども，リードの隠れた批判対象がアダム・スミスということは強調されても，表だった批判対象であるヒュームにはなぜか言及がほとんどないのはどうしてであるのか，わたくしは理解に苦しむことだけ述べておきたい。もっとも，プリーストリもまた，なぜかコモン・センス学派とのつながりのなかでケイムズを論じていない。この点，篠原氏のケイムズ論からわたくしは多くを学んだこともまた述べておきたい。

（一橋大学社会科学古典資料センター教授）